

## FASID 第 250 回 BBL セミナー（記録要旨）

テーマ：ウェルビーイングを起点にした地域づくりの展開

日時：2022 年 12 月 1 日（木）12:30-14:00

場所：Zoom ウェビナー

講師：高野 翔 氏 / 福井県立大学 准教授

出席者：16 名

### 1. 発表要旨

#### ■ はじめに

従来の経済指標では捉え切れなかった、人々の幸福や地域の豊かさを正しく捉えようという国際的な動きが近年高まっている。これまで豊かさの国際標準指標は、国内で生み出されたモノやサービスの合計額を表す Gross Domestic Product（国内総生産）（以下、GDP）が一般的に用いられてきた。しかし、経済成長は必ずしも主観的な幸福につながっていないとの見方から、国連機関による世界幸福度調査などでは、住民一人一人の心身の健康や暮らしの満足感を捉えた「ウェルビーイング」の概念が取り入れられ始めている。

今回の BBL では、高野翔氏の Gross National Happiness（国民総幸福量）（以下、GNH）を国是とするブータン王国での調査や福井県内で携わってきた施策の経験から、ウェルビーイング（以下、WB）を起点にした地域づくりについて紐解いていく。

#### ■ 自己紹介

2009 年から JICA 職員として勤務。その間、ブータンで 3 年間の業務に携わった経験が自分にとって大きなギフトとなった。2020 年からは、地元である福井県立大学に勤務。あわせて、越前市総合計画審議会会長、小浜市食育推進計画委員、福井市／永平寺町 まち・ひと・しごと総合戦略委員、ウェルビーイング学会理事などを務める。自身の研究では、WB を評価軸としていかに公共政策に取り込むか、まちづくりに活かしていくかをテーマとし、理論と実践を行ったり来たりしている。

#### ■ ウェルビーイングとは

**WB の定義:**WB は一人ひとりの“幸せの実感”が大事であり、学問上の定義を考える場合、WHO（World Health Organization）が「健康とは、身体的・精神的・社会的にウェルビーイングな状態」と定めたことが起点となる。日本には「心身ともに健康」という言葉があるが、この言葉が示すとおり、身体的・精神的については納得できる場所である。WB は、加えて「社会的にも良好」であることが重要となる。日本でも、孤独は健康に悪く、社会的つながり、人とのつながりが心身の健康にとって大切と言われるようになって久しい。WB は、身体的・精神的・社会的に良好な状態にあり、実感する幸せということが出来る。似た

言葉に Happy があるが、学問上 WB とは区別される。Happy は短期的なポジティブな感情である。WB は中長期的であり、「自分のありかた」まで踏み込んだ概念である。WB という大きな概念の中にある一時的な高まりが Happy だといえる。ブータンにおける GNH の H は Happiness であるが、ここでは WB と同意である。

WB は学問上、中長期的に持続するものであるが、その Well (よい) Being (状態) とは、人毎、地域毎、国毎に異なる。コロナ禍を経て、「よい状態」をそのあり方から捉え直そうという動きが出てきている。WB という概念は、経済的な単一の物差しだけでなく、実感している心の豊かさを図る物差しが必要となった際に重要になる。WB は心身に加え社会的なつながりという尺度も備えた概念で、一人ひとり、それぞれの価値観に基づくものである。ここが一番大事になってくる。

**歴史的背景：**WB へのアプローチは、2500 年以上前から始まっている。最初は哲学的なアプローチで始まった。その後転換となったのは心理学などを中心とした社会科学的アプローチで、数値化し客観的に計ることでコンセンサスが得られ、要因も解析できるようになった。そして、その後に大事になってくるのは、WB を深めるための場づくり、地域づくり的なアプローチである。

**ブータンの事例：**哲学的なアプローチにおいては、アリストテレスは幸せを最高善、これ以上ない至高の目的としている。これを公共政策、社会科学的なアプローチとして活用したパイオニアの国がブータンである。ブータンは人口 70~80 万人、面積は九州全土に等しく、インドと中国という大国に挟まれた小国である。社会基盤では、まだまだ課題も多い。土砂崩れによる幹線道路の遮断などが頻繁に起きる。その一方で、この国の社会には寛容さがある。地域コミュニティが厚く、文化や伝統を自らのアイデンティティとして重んじる人々である。この国の国是となっているのが、GNH であり、憲法 9 条に明文化されている。

なぜブータンで GNH が実現されたのか？それは、ブータンの前国王のイニシアチブによる。前国王が 1970 年代に GDP ではなく、GNH を国是として掲げて以来、国を挙げて社会実験を続けている。具体的に政策に取り込まれたのは 1990 年代からである。政策に取り組む上で功を奏したのは、自分たちの価値観の上に立って 9 つの領域を定めたことである。それらがバランスよく整っている状態をよしとし、その下に 33 の指標を定めた。こうしたアプローチは 1990 年代、世界的に見ても他になく、WB の第一人者であったといえる。そして、GNH の追求を可能とする環境要件の改善のために刻苦奮闘することを国の役割と位置付け、憲法にも刻んでいる。

ブータンの GNH の調査は各世帯を訪問して行われている。その結果がフィードバックされるのが、GNHC (Gross National Happiness Commission) という国家機関で、政策決定において大きな権限を持つ。この機関があることで、GNH を中心とした政策作りがなされ、人々の幸せを中心に置いた PDCA (Plan-Do-Check-Action) を繰り返すことができています。

**潮流：**こうした WB を中心とした政策作りはブータンだからできることではないかという声をよく聞く。しかし、今日では国際機関を含めこうした考えが主流となっている。例え

ば国連では、World Happiness Report を 10 年以上も前から発行している。また Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）（以下、SDGs）の次の目標を考える上でも、SDGs の目的が人々と地球の WB であるに立ち返り、WB を中心とする考え方が主流となっている。そして、SDGs の次は Gross Domestic Well-being（国内総充実）（以下、GDW）や SWG（Sustainable Well-being Goals）といった目標が掲げられるであろうと考えられる。国際機関だけでなく、ニュージーランドやアイスランド、スコットランドなど WB 中心に据えた国づくりに取り組む国のトップも増えてきている。

日本では、一人当たりの GDP の成長が、必ずしも幸福度の向上に結び付いていない。そうした中、骨太の方針でも WB に言及されるなど、政府の方針の中に入り込んできている。また、企業経営においても WB は注目を集めている。昨今の研究では、WB が高い企業ほど、生産性や売り上げ、創造性が高いという因果関係が認められている。これは、今までの考え方から因果関係が逆転したことを示している。企業は従業員がよりよく働ける場を作ることで、パフォーマンスの最大化を図る必要がある。日本の名だたる企業でも CWO(Chief Well-being Officer) のような立場の役職を置く動きが出始めている。

#### ■ ウェルビーイング×地域づくり

では、WB をどうまちづくりに取り込んでいけばよいのか？私は鍵概念を『「居場所」と「舞台」づくり』と定め、各事業を進めている。安心できる場や居場所があることと、人々の WB の高さには正の相関性が認められる。会社や家庭だけでなく、まちという社会においても、そうした居場所づくりが重要となってくる。こうした居場所は「人間の尊厳を満たす場所」として捉えられる。加えて、自分の人生にオーナーシップを発揮する舞台も必要である。この舞台は「自己実現・自身の可能性を開かせる場所」となる。こうした、その人にとっての居場所や舞台が充実している土地には定住志向も強くなる。日本社会は都市部に舞台を求める傾向を作ってきた。福井でも女性が都市部に出る傾向が顕著である。そうした中、道路を居場所や舞台として活用する社会実験「ふくみち」や、まちのいたるところを教室とする市民大学「ふくまち大学」を実施してきた。公共の場を活用し、自分たちが望む風景を実現させることが地方都市のまちづくりでは大変に重要になってくる。「居場所」と「舞台」を作ること、これが WB からまちづくりへの打ち手である。

#### ■ ウェルビーイング社会の実現

世界の開発の尺度は、物質の豊かさを尺度とした GDP から、このままではいけないという意識から生まれた SDGs へと変化してきた。その SDGs の次を考えるときが来ている。その上で重要なのは、SDGs の目的は何だったか、立ち戻って考えることである。そこに WB という物差しが必要になってくる。マクロな視点において、国際社会、国、地方、様々な場所で WB という物差しを使って、今まで光があたってこなかった生きづらさの解消や生きる豊かさの増進に貢献していくことが重要である。一方でミクロな視点で考えるなら、まち

づくりにおいて「尊厳を守る居場所」と「可能性を発揮する舞台」をどう作り出すかが重要になる。WB は、先進国・途上国にかかわらず重要な概念である。国際協力の現場でも、WB を中心に据えた国づくり、特に公共政策のガバナンスにおいて WB の概念・物差しを中心とした協力が求められるようになるのではと思う。

## 2. 質疑応答

Q：教育分野の WB への効果とそのインパクトの評価方法についてご存知の内容がありましたら教えていただくと幸いです。

A：教育の分野では OECD（Organization for Economic Co-operation and Development）が、生徒の「エージェンシー」と WB について言及している。「エージェンシー」とは生徒が主体的な学びができるかどうかであり、そのアウトプットの尺度として WB を用いている。日本の教育においては、自己肯定感の低さが問題視されている。OECD の報告書を参考としていただきたい。

Q：イベントやプロジェクトを企画する際、人同士の交流を組み込まないと、個人での参加に終わり、交流が生まれにくいのではないかと思います。

A：おっしゃるとおり。WB にとって社会的なつながりが重要であるように、最後は人と人との出会いである。

Q：福井市でのまちづくりの取り組みに関して。地域の多様な方々への理解の促進やどのように先生自身が「仲間づくり」をされたのでしょうか。

A：JICA 職員として働きながら、様々な活動が続けてきた。活動しないことには仲間づくりは不可能であった。福井のまちをどう再編集するか考えた際、活用すべきは「学び」という視点だった。

Q：インフラ整備等に、WB の視点を含めていく（主流化を進める）ために、GNH の指標を参考にするほか、何か指針のようなものはあるでしょうか。

A：例えば、2040 年までの国交省の道路づくりのビジョンは WB にありと言っている。こうしたところに指針となるものがあるのではないかと参考としていただきたい。

Q：高野さんが大学進学を機に福井を出た当時と、大学教員として福井に戻られた現在とを比較して、福井という地域のウェルビーイングはどのように変化してきたか、また将来はどのように変化することを期待されるか、個人的な実感をお聞かせください。

A：福井という場所より、時代の変化の方が大きい。我々の頃には都市に出ていくことが普通であった。外に出ること自体はよいことだと思うが、いろいろな刺激を受け、福井に志を果たすためにかえってくる。これからは、そういう循環があってほしいと思う。それに応え

られる地域になっていかねばならない。

Q：ICT（Information and Communication Technology）の発展や人の移動が自由になっている状況で、居場所はどれくらいの大きさの単位で考えればよいでしょうか？

A：自分はカフェやオフィスというサイズの単位に注目している。オンライン空間も複数の居場所のうちの一つとなる。今後、居場所は物理的なものだけではなく、オンライン空間の存在により、より生きやすくなる人がいるのが実態ではないか。

Q：WBを進める上での難しさは何ですか？

A：幸せの形を決めてしまっはいけない。それは人それぞれである。WBであるかどうかはその人自身の価値基準によることは崩してはいけない。そこが難しいところ。

Q：お話の途中で女性の参画のことにふれられていました。ご調査や生活の中で、ブータンにおいては様々な場面での女性参画の機会があり、女性自身 WB が高いと感じるのでしょうか？ちなみに福井市でのまちづくりの取り組みに関して、ジェンダーに関する試みなどはありますか？

A：ブータンでは、家や土地を引き継ぐのは女性の方が多く、女性が家計の権限を持っている家庭も多く、家の中の意思決定権は日本より大きいだろう。その意味ではブータン女性の WB は高いかもしれない。日本全体もそうであるが、福井では性別役割分担意識はまだあるものと思う。幸福度ランキングの調査では福井は1位であるが、その調査は客観的な視点のみであり、WB は計られていない。女性の就業率をみると全国的に高いが、女性の管理職の率を見ると、全国的に低い。福井にとって、女性の生きやすさは WB の鍵であると思う。

#### 【参考】

ふくい地域経済研究第 32 号（2021 年 3 月）

ウェルビーイング（Well-being）の公共政策への展開に関する考察

ーブータン王国の GNH の事例を参考にしてー

[https://www.fpu.ac.jp/rire/publication/regular/d153979\\_d/fil/02.pdf](https://www.fpu.ac.jp/rire/publication/regular/d153979_d/fil/02.pdf)

ふくい地域経済研究第 33 号（2021 年 9 月）

ウェルビーイングの概念の自治体政策への適用可能性と課題に関する考察

ー福井県永平寺町におけるウェルビーイング調査

[https://www.fpu.ac.jp/rire/publication/regular/d154112\\_d/fil/takano.pdf](https://www.fpu.ac.jp/rire/publication/regular/d154112_d/fil/takano.pdf)

ウェルビーイングレポート日本版 2022「第二章：国際社会におけるウェルビーイングの歴史的変遷」「第五章：日本のウェルビーイング実感の測定」ウェルビーイング学会 2022 年

[https://society-of-wellbeing.jp/wp/wp-content/uploads/2022/09/Well-Being\\_report2022.pdf](https://society-of-wellbeing.jp/wp/wp-content/uploads/2022/09/Well-Being_report2022.pdf)

以上